

1 学年だより

令和3年10月13日(水)

夢の宅配便

1 年学年主任

水野 喜代治

連載小説 第二編

「キヨたんの小さな小さなダイヤの指輪」

第8話…母との指切り

「ありがとう。喜代治。おかあちゃん…このダイヤの指輪をはめて贅沢していいのかな。何よりも大事にするからね。この指輪！」と私に頭を下げた喜んでくれた。私は、母に横浜銀行の封筒を手渡した。長い付けまつ毛で化粧をした綺麗なお姉さんが、ブルーの小さな指輪ケースに指輪を絹の布できれいに拭いて輝きを増して入れてくれた。「はい、お母さんへのプレゼントですよ。」と私に渡してくれた。母が、お店の人と会計の相談をしていた。21000円の残りのお金を月賦で払う手続きをしていた。手続きが終わって、母と私はファミリー大食堂で食事をした。私はチャーハンと母はオムライス注文した。食事をしながら母の手を見ると、小さな小さなダイヤの指輪が輝いていた。私には、世界で一番輝いているダイヤに思えた。

第二編 完

第二編 完 とパソコンで打って、「キヨたんの小さな小さなダイヤの指輪」が完結した。パソコンのキーボードから手を離し、コーヒーを一口飲んだ。コーヒーカップを置いて、私はそっと机の引き出しを開けた。引き出しの奥にしまっている指輪ケースをそっと開けてみた。53年前に、箱根登山デパートで買った小さな小さなダイヤの指輪を久しぶりに見つめた。ダイヤモンドの光の中に母が浮かんできた。あのオムライスとチャーハンを食べた日から、葬儀など特別なことがない限り、母はこの指輪を必ずはめていた。いたずらをして学校の先生に叱られた夜に、母と「二度と悪いことはしません。」と指切りする時、母は指輪をしている薬指を出してきた。「喜代治は、優しい子だから、二度と迷惑がかかることをしないようにね。」と諭されて、母の薬指と泣きながら指切りした。何度、指切りを交わしたことだろうか…ダイヤの指輪を見ながら母の笑顔が蘇る。

「ありがとう。」と心につぶやいで、ブルーの指輪ケースの蓋をゆっくり閉じた。



引き出しの中の指輪